



KAMIMURA

みずうみのほうへ
上村亮平

RYOHEI

み
ず
う
み
の
ほ
う
へ

みずうみのほうへ

二〇一五年二月一〇日 第一刷発行

著者 かみむらりようへい
上村 亮平

発行者 加藤 潤

発行所 株式会社 集英社

〒一〇一・八〇五 東京都千代田区一ツ橋二・五・一〇

電話 【編集部】〇三・三三三〇・六一〇〇

【読者係】〇三・三三三〇・六〇八〇

【販売部】〇三・三三三〇・六三九三（書店専用）

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 ナショナル製本協同組合

© 2015 Ryohei Kamimura, Printed in Japan

ISBN978-4-08-771598-9 C0093

定価はカバーに表示してあります。

造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意ください。

み
ず
う
み
の
ほ
う
へ

サイモンは言った 夜の底には語るべき言葉はありません
私たちは口をとじた

サイモンは言った 夜の底には見るべき世界はありません
私たちは目をおおった

サイモンは言った 夜の底には物音ひとつありません
私たちは耳をふさいだ

そういうふうにして
私たちは丸裸のまま 夜の海に放り込まれたのだ

ずいぶんと時間を経て振り返ってみて、ぼくはときどきこんな風に思ってしまう。あのときぼくの身に起こったことはどこかずつと遠い別の世界の出来事だったんじゃないかと。本当のぼくは何事もなくその日々や人々のあいだを通り過ぎていただけじゃないかと思うのだ。ほんのちよつとしたなにかの手違いでぼくがあの世界にぴんと弾かれてしまっただけなんじゃないかと。誰ひとりいない甲板も、熱にうなされて見上げた夜空も本当はどこにもなかったんじゃないか。あの針のように鋭く輝く星や白い月に照らし出された銀色に輝く何万という魚たちもどこにもいなかったんじゃないか。そういつたことを。

もしもあのとときそうして魚まみれの日々を過ごしていなかったらきつと街からひきあげてくることもなかったし、こうして夜の湖に足を浸すこともなかったのかもしれない。

十一月の湖は思ったよりも温かい。とても静かだ。

湖はぼくに父のことを思い出させる。父のその穏やかな、子供のような目。眠りから覚めたばかりのような、どこかまだ夢のなかをさまよっているような目だ。手にふれている

ものはきちんと見えているのに、心は遠くの何かを見ているような目。

父はときどき、悪意のない、子供の興味をちょっとひくような話を面白半分にぼくに話して聞かせることがあった。どの話も、父はきつとたいしたことのない思いつきをただ口にしていただけだったのだと思う。でも夢みがちな父らしいその語り方は好奇心の強い六歳のぼくの心をぐっとひきよせるには十分だった。例えば高層マンションの最上階に住む太った男が毎朝のようにふわふわと雨傘で飛び降りる話。ぼくが疑問を口にする。

ねえ、さっきはその人はたかいところがこわくって窓にさえ近づけないっていつてなかった？

すると父は中空に、まるでふわふわと雨傘につかまって降りてくる太った男の姿を確認するように少し目を細め、でも彼にとつては階段やエレベーターはもっと怖いものなんだと言う。でも、とぼくは肩をすくめる。

そんなに太ってる人がかさなんかでとびおられるのかなあ。ぼきんとおれちゃうよ、と文句をつけると、父は、傘といつても開いたら家ひとつぶんくらいの大きさの特別のものだからねと言う。いつもそういうふうにして思いつきの話は少しずつ輪郭を帯びていく。もちろん六歳のぼくでも父の突拍子もない話に首を傾げるようなことは何度もあった。でもその度に、父はまるで本物の記憶をたぐるように中空に目を細め、ひとつひとつ丁寧

答えていった。父の話のほとんどはちぐはぐで、脈絡のないものばかりだった。相手が六歳の子供でないとしたら、ただの子供騙しの寓話としてきれいに枠組みのなかに収められ、整理される種類の話ばかりだった。でもぼくにとっては、まだ本棚のなかにたっぷりの友人や冒険がつまっていた幼いぼくにとっては、父の話はまさに自分の住む世界のどこかのいつかに起こった話として響いた。

ある夜、ぼくはひどく悪い夢にうなされて叫んでベッドから飛び起きたことがあった。どういう夢だったのかは覚えていない。目が覚めると、胸はどきどきして息苦しく、お腹は水のように冷たくなっていた。父はベッドに腰かけ、ぼくが落ち着いてまた眠りにつくのを見守っていた。

「悪い夢にのみこまれそうになったときには」と父は言った。「ただの夢だと思えばいい。テレビとおんなじさ、スイッチを切ればもう大丈夫。どんなお化けだって出てこれやしな idarou? 大丈夫、もうすぐ覚めるって思うんだ」

大丈夫、もうすぐ覚める。

七歳の誕生日。ぼくは父に揺り起こされて目を覚ました。

とても静かな朝だった。囁くような雨はもう七日つづいていた。細やかな雨のけむる朝、

ぼくは父に手をひかれ、誕生日プレゼントとして希望していた一泊二日のフェリーでの旅に出るために港へとむかった。

その日の朝、父は午後には雨はあがるだろうとぼくを起こした。あたりはまだ薄暗いというのに父はすでにずっと早くに起きていたらしく、髭を剃り、身支度をしていつでも外出できる恰好をしていた。ぼくはぼうっとして父を眺め、それから時計に目をやり、そしてまた父に目を戻した。父の表情はとてもリラックスしていて、数日のあいだ目にかかっていた霏^{もや}は、すっかり消えていた。そういえば昨夜の電話のあとはいつもと様子が違っていたなとぼくは思った。夕食の片づけをしている父の手がふと止まりじっと考えこむようなことも、目をぎゅっと閉じてため息をつくようなこともなかった。ただ窓の外を流れていく雨の行方を眺めているだけだった。

雨とともにじまった電話は雨とともに止んだ。七日前の夜おそく、その雨はやってきた。いつ降りはじめたのかはわからない。雨といっても注意して目を凝らして耳を澄まさないといけないほどの細かい雨だった。父は午後中ずっと誰かと電話で話していた。流し台の前に立って小窓に向かい、いつまでも受話器に耳をひっつけていた。親しみのある声でゆったりと、ときどきうなずき、ときどき喉の奥で小さく笑った。

長い電話のあと、ぼくがいったい誰と話していたのかを聞いてみても、父はそのうち会

いにいこうと言うだけで、話し相手のことは教えてくれなかった。電話のあとの父はいつても機嫌が良かった。父は翌日も、その翌日も同じようにして流し台に手をついたり、もたれながら誰かと話をしていた。夕食の後かたづけをしたあと父はぼくに早く寝るように言い、それから電話をかけた。ぼくは自分の部屋で本を読みながら、いったい誰と話しているのだろうかと思いつつ眠りについた。

雨はいつまでたっても止まなかった。増水による河川の氾濫はんらんや土砂崩れのニュースが増えた。そして父の電話も止むことはなかった。日がたつにつれ、父の声は雨に濡れ、表情は曇ったままで、不機嫌な様子で肩をすくめることが増えていった。普段もうわの空でため息をつくことが増えた。ときどき肩がいかり、首をぐっと前に突き出し神経質な目つきをするようになった。

ぼくが目玉焼きの焼き加減をフォークでつついてたしかめているあいだ、父は電話でフエリーの運航会社に就航時間と空き状況を確認して腕時計に目をやりながら何度かうなずき、大丈夫だとぼくに目配せをした。そして電話を切り、さあ船出は近いぞとぼくに早く食事をすませて着替えてくるようにうながした。ぼくは浮き立つ気分でナップザックに玩具のカメラやとっておいたスナック菓子を詰め込み、鏡の前で寝癖を直して船に乗る準備をした。初めての航海。その前の夜、ぼくはちょうどヴェルヌの『十五少年漂流記』を読

み終えたところだった。三月九日の嵐の夜、十五人の少年たちを乗せた船は難破して一人の大人もいない世界へと投げ出される。読み終えてぼくは思った。ぼくだって難破した船に乗ってれば、これくらいのは簡単によつてのけるさ。

七歳になったんだ、とぼくは洗面所の鏡をのぞきこんだ。ぐっと背伸びをして、にっと鏡に笑いかけてどこかにあるはずの成長の印を探した。でももちろん誕生日になったからといって一晩で急に身長が伸びたり大人びた顔つきになるわけじゃない。ぼくは小さな歯を指の腹でこすり、父の大きな驚鼻にはとても似つかない、小さくちょこんとした鼻を引っぱったり、弾力のある頬を手のひらでびしびしと叩いたりして相変わらずの幼さにため息をついた。七歳の誕生日がぼくに与えてくれる成長のプレゼントはどこにも見あたらない。この先も大人になれるような兆しがまるでない。ぼくはがっかりしたのを覚えていた。ぼくには冒険をやつてのけるだけの勇氣があった。一人で遠くを旅してやつていけるだけの自信もあった。どこにだつて行きたいという氣持ちが体のなかでいつもむずむずしていた。でもただ、ぼくにはそれに見合った年齢がまだ足りていなかった。このままだといつまでもどこにも行けないし何者にもなれないじゃないか。すっかりしろよ、と鏡のなかの自分をじつとにらんだ。それからばしゃばしゃと顔を洗つて氣を取り直し、ナップザツクを背負つて野球帽をかぶり、準備ができたと言つた父の部屋をノックした。

部屋に父はいなかった。父はまだ朝食の後片付けをしていた。台所から食器を洗うかちやかちやという音がしていた。ドアはうつすらと開き、静けさが床を漂っていた。

今でもぼくは、その部屋の光景を思い出すことができる。カーテンは閉められ、暗く静かだった。がらんとして、無機質で、ベッドのシーツは皺ひとつなく、いつもは机の上に散らかっている筆記具や本もきちんとあるべき場所におさまっていた。仕事机の前のカーテンには家の裏手にある背の高い木々の影がゆらゆらと揺れていた。いつもと違っていたのは電話線が抜かれていることだけだった。ただそれだけのことで、部屋はまるで違ってみえた。

ぼうぜんと部屋の入り口に立っていると、カーテンがふわりと膨らんで雨の匂いを含んだ風が前髪をゆらした。風が耳の裏をするりとぬけていった。それからふいに頭におかれた手に、ぼくは驚いて声をあげた。ふわりと洗剤の匂いがした。父はびっくりしてぼくの頭から手をはなした。腕をうつすらと覆う毛が水気を含んで肌にはりついていて。父は少し戸惑った表情をうかべ、気をとりなおし、それからもう一度ぼくの頭に手をおいた。さあ、乗り遅れるぞと言った。心臓がどきどきして、頭はくらくらしていた。それでも父の顔を見て、どういうわけだかほっとしたのを覚えている。部屋もいつもの部屋に戻っていた。クリーム色のカーテンは柔らかな光に膨れ、部屋には古い本とインクの匂いが満ちて

いる。ただ電話線が抜けているだけだ。たいしたことじゃない。あやすように頭におかれたままの父の手を振り払って、遅いよと非難がましく抗議した。父は悪かったと唇をきゅっと曲げ、肩をすくめてぼくを廊下に出した。それから穏やかな目で部屋をぐるりと見回し、そっとドアを閉めた。

父の言ったように、バスが市街地をぬけるころには雨はほとんどやみかけていた。あたりは相変わず薄暗く、白と黒の絵の具を混ぜ込んだような層の厚い雲からはまだばらばらと雨が落ちてきていたけれど、数日のあいだ空を覆っていた鈍色にぶいろの雲よりはずっと明るくなっていた。

ぼくらは港広場の入り口でバスを降り、倉庫を改装したブティックやレストラン、造船所や工場地帯をぬけてどんどんフェリーの乗り場へと歩いていった。父は大きな雨傘を右手にもち、左手でぼくの手をひいて、ぼくは飛びごたえのある水たまりに出くわすたびに父の手にぶらさがる子猿のような恰好でひよいひよいとジャンプして飛び越えた。

真冬の港は想像していたよりもずっと人気ひとけがなく、うらぶれていた。シーズンオフのせいもあったし天候のせいもあった。突堤が三つほど湾に向かって突き出っていて、ぼくらが乗る船以外にはいくつかの小さなボートがロープで頼りなく岸に縛り付けられているだけ

だった。ぼくはため息をついた。ぼくらの船はパンフレットにあるような豪華客船というよりは、せいぜいが貨物船より少しはましだろうといった代物だったのだ。そうやって眺めているあいだにも錆はどんどん船体を覆っていくんじゃないかという独特の古びかたをしていた。手作りのクリスマスツリーのような安っぽい電飾や愛想のない船員らにいくらかがっかりしたけど、それでもぼくを興奮させるには十分見応えのある船だった。たしかに想像していたのより安っぽい船だった。でも想像以上に大きな船だったのだ。

船の頭から尻尾まで走ったらどれくらいかかるだろうとタラップから甲板に降りた。学校の運動場なんて目じゃないと嬉しそうに走り回っているぼくを見る父も嬉しそうだった。ぼくらは船の中心部にあるフロントで鍵を受け取って部屋を探し当て、わずか一日かぎりの我らの寢床に荷物を広げ、しばらく船のなかを探検してまわった。フロントの前にはピンポン台が二面あって、ぼくらはぐらぐらとゆっくり揺れる足下を気にしながら三ゲームほど楽しみ、誰もいない小さなダンスホールの隅のソファに座って壁や天井の装飾を見回したりして紳士をきどって楽しんだ。

午後の軽食の案内を告げるアナウンスに顔をあげると、腹が減ったなと父はパンフレットをくしゃくしゃに丸めて屑籠くずかごに放り込んだ。窓の外はまだ三時だというのにうす暗く、「サンセットクルーズ」と書かれたパンフレットにある写真とは似ても似つかないほど

寒々しい色をしていた。

食堂に向かう途中、父はなにかを思い出したらしく腕時計に目をやると、ロビーに戻って売店で煙草とぼくの風船ガムを買って紙幣を崩し、すぐにすむからと喫茶店の入り口にある電話ボックスに籠もった。でも五分が経ち、十分が経っても電話が終わる気配はなかった。心配になっておそるおそる父の横顔をうかがったけれど、何事かを言い争っている様子はなかった。ただじつと相手の声に耳を傾け、ときどき頷いたり、ぼそぼそと何かをつぶやいているだけだった。仕方がなくぼくは、風船ガムを二粒口に放り込み、あとで父を驚かせるために大きな風船をつくる練習をしながらひとりでそのあたりを散歩することにした。機関室や船長の部屋も探してはみたけれど、奥まった通路にはだいたい関係者以外は入らないように注意書きがあり、鎖がひかれていた。それでもぼくはなにか面白いものを見つけようとぶらぶらと廊下を歩き回り、階段の上り下りを繰り返して、片っ端から開く扉がないかと試し、そうこうしているうちにやがて甲板に出た。

ぼくは息をのんだ。甲板の向こうには視界におさまりきらない大海原が広がっていた。その圧倒的な世界の広がり方にぼくの足はぶるぶると震えた。風は唸りをあげて強く吹き